



五元集

まのこ塾舎

利

中村俊定文庫
文庫 18
290
3





中村俊定文庫

俊定藏

中村

音子一世の奇句はことごとく五五二
はくせりといふも其阿の自画し
戯言の句を引あひ一汁百遍に
酸吟みハ柳巷の曉橋店の昏く
くもさきとてしるるおとこ
ハこれとてさやして新よひの物
よさめ吾家この青禮とよめを
うさうれあましひくさういひもて
編てまゝ一書とふとのこ

是より別して務負を以
てその心は英雄乃臣を以
て馳走をうる所神妙也
叩境の祭のる、第一一
成るしとて白綿つきの
放ちる東ハお坂山南ハ
立田西ハ水生ハ有乳
乃鎮護を以て先一ツ
の野書を認る
治雞坊乃何某筆を
取て田饒、詞をかり蘇
秦、謀を顯して神明

納受の志を乃る
開の清水を
多水を一と頂禮
なりとを

三十六合

春風心かられも引も家雞乃麻

二字と次

律節會不常ををの家の家鴨辰下

足よりをの音乃新羊歌仙
乃左坐守のくとぬるる空の天鶴

千一麻ををの軍配ハ
曲をつとるなり

右介がゆりたのたの春を
なる家鴨乃立片す
牝雞乃朝夕の申し押さふ
留主居役付らるる更切て
附らる其身の立居重く大
声ををの勤番をの也
道戯ハあひる傳兵衛とて
ひー乃笑ひその
ちりちり

卅七合

桃花雨をば竹の葉乃みくは足其角

二字トス

五六間述てふ返に尾波の

乙字トス

清明の節大雨志きりて思ひ

敗軍次稻麻竹葦に入乱

ゆれ名の志きり尾波よりかたり

何あめり志きりらん落書

雞去昼竹葉とりふ句を書

捨り是れ山沓の僧雪乃

鶴白り犬走生梅花とらひ

對ちあをるを時あつて用ひる

とち桃花雨ふるはり羽翼

ハ醜くともくも也晴て後

男浪乃とつて返りなめらも

こゝ尾をらんをれを尾花浪

乃勢立とをゆひさるれ待る

卅八合

白綿付乃黒て仕て取れ巳日や

乙字

桃節つる糸ほとけり枚の埒百之

也

果出乃男白綾のふんごり丸

片行てやんを出入れくねく願角
カマヤあつて酒陶氏とんゆ
立髪杖乃葉にそまみちう胴骨
つんぐりとて叩斗樽のそく丸く
あつてう桃花の酔はれんと巴乃
目の精を極力量いくあらん
卅九合

く、明洞通をいふ鳥甲

捕距中と云

常閑平色並をそと次擲もか素琴
し字と云

中入しと云はりあつてお女房乃

後見んとは心得ぬ業也富士の煙
乃かりやるあつらん力かひあく歯ふ
あつてはしと牝雞晨吟まこと
アさばいみこととを伝へ伝は象も
らくはあつて是鹿必ふるといふ詞を
あつてはしと櫛も心をうけてはし
しとあつて力乃出る寂中をそと
四十合

茶筌尾中鏝をたぐいとみうれ習奠

左右し字

あつて當うしとみも距が其角

茶筌髪にゆるる尾片しる和
二十番乃志る毛も手弱き
方也何てかつし乃難言平一の
崩口をるる色しを指とん
四十一合

鼻をきくを味方へ引や番 椒 雪花

此とん

油の殿空餅ハてらる庭 莖
二字
巖を乃水舌鳴し三伏の番椒
に鼻の汗次辛烈乃氣忽ち
頂平へ急ておる海ふ血のるる

男寒相撲急いりる中あし終ら
味通へぬいりてもくろしあま
空席しつきたる飲手もあり
とれい不ひ乃心うけをせいと
何けと本意とをせ
ハッ立セツ起ハ関乃東の兵
卯十二合

兵と動もしををト、味ひ何壯

二字

足田鶴乃鞆口丸乃負てし務
桃李不言乃詩兵と褒美の上

うらふ州本をさしけしる一言誠ま
かゞしげ隊トニとよひ出されて
棧鋪より此花をさしけり
足田お終の世末ハ伊勢の国
是乃裏ハありきいあふんが 慈鎮
はふよせても洗はけりなり
成乃高下ニ松詞を置れり
はつてなるの法トともいへると
鞆丸のともいひつげ侍と名
さふやうとら丸の法をさすも
傍をさるしとの評義か
伊家乃る世四月あかへらる

る

卯十三合

いとめき木乃芽を初とく 距亦右此

胡葱二字と次はあふも取り 籠古周

是彼引田申るも何れと

雞乃坊主のいふ若れが 園指

先蹤正 かく双ふをさす

垣をさすて 園を台すれと云

わらわとその人、去らまぬ成る

右の時節お應乃るまひ州也

負手の味をわきまるとりしも
いふべき巧言せ方の麩敷景
はるをそといはれ酔乃過しるを
墨のぬるをりしはるもい

破味曾

芥四合

八乃字やうたの寄事と馨醒

左右しあはれ

甯利を母たひらぬは吐制しん吾子

酔とりしをいふは好悪の

詞より心算するはりしはる也

未冠はりよるは距之希をき

ひらぬもの性得自然なりし

めしひらぬは入河津殿の侍也

一万箱玉母のしるはると其母房を

備えて母衣とりし羽袴をきせ

しるはるとは樊噲をもあはれ

老ものしるはれ

卯十五合

血盲乃幾直に掃きぬ密掛筆棹孤

屯

尾雪も緋挑のほてりしはる百猿

二字あり

雞籠の山脈ありてはる日、
去る頃、周こもてしうし音を
啼くつみありし、密掛の皮着の
細代のをちあきから籠に入られ
是をうつして三月と知る惜かり
血亡也若武者たはも目
かけ信ち毛をわし冠をきそひを
て紅挑乃ありもねいあをし
冠重吳天雪爪をかくそ
楚地たり花ももあし
かといきて後いあらん
卅十六合

撫 衛を死羽乃平、難修寺

二字あり

南京乃引音を猛平水や空毎開
し字あり
天王寺の格傍後記ありあふ
所大坂矮雞の平より其手に
ありし、今とも死羽のて
鳴屋ありし、白くも、
是源氏の嫡、南京の小太布
ゆ入りし、いそれて尋常
引音を大勢を合けらふ
中あれは水天をすてす

乃及ふおれり関路のるも
声くたま申
卯十七合

足病乃かいは事や一 嘴 疲 花月
乙字

朱冠癰に潤つ三月待れり
烏医師の曰足やみ乃いし
嘴折失盡てさむ方か
是當分乃弱をさひ千あり
あかろるる冠癰希有に
一之六ヶ補病也常皇と病

鷹氣鬱は寒苦鳥飢なり
多し良薬を得る此言
あこ此病あると漢家乃
あ一 至癰發の膏薬に
多きとるるあつ一の也
去るらく命運を全一と
かきねて軍や色 ともや
四十八合

波を蹴て巴を負一悟氣 喰 笹分
乙字
雞籠二人 静を合とたり
戴冠文とる

此北負る乎やしは七誘の中
直もう連さりなるとわかる悟気
嗚もはなり情あらば唇を
あらはらふと益さうをて
横嫌らる振興あらば栗は
乃あらず平放れて後いつら
けん其場まも大あらう
〜あらう三芳野の奥深
大深富の放たし美雜あり
流徒あらうとさらう其
影を作らましたらわらぬ
台なる平野勢たるとすまらぬ

下と二人靜一

卯十北谷

沼津より足高山の大樽立朝

屯とれ

島あらうやらり乃雞わり可

二字よす

清の関取乃血脈原吉吉をを

心をまして宿らる利ノ也

共也みかとらる也

名をまして君も同くらを知

をもとらて目出るの一とり

不く乃あらうをひみるやりま合をを

竹ら芳野唐土るもろもろ
翅の薫物一丸紅粉化粧
花美玉ふふ人れ心をあはれ
迷をもとねるは後法度ふ成と
ちともみをおちやりぬかの
幕爪の巻ふ

身のうしろをあげくふあそめゆか
とらかきまてそ音もあつれ
うつきか乃奇也此心よか
とと

五十九

傍口内推すも咏くも背て門

戴冠文士

傳大士を雞鷲うゑしひと聯合飲以

今ハ寺く乃雞を召忽推敲
三年の執りありて推ハカ咏
ハ品也韓退之是を相伴
て以鳥鳴春と世上ハ鳴りてを
らせしり輪痕乃三影
あきあきを大訓てそ魚の
まいて場とくうとんてそ
乃狂ひらうて笑ハ

五十一台

拍手あかつ色をまをかハ具負 辰下

左右屯とん

尾とる影隠しとる放 雞百之

社頭、雞川、まき寄合此

を去つ然んとあ拍手、松柏の

霜の後まをともとも各浪人

角刀をねは笑あものぬ

神山乃拍り平手うらとるを

災来帯も

五十二台

唯物血臭ひ嘴をけりも州 雪花

五字

願 翠凡赤き酒乃いともかも 雪花

捕距武

片も州とも高しから業を

得を舞す意とひ瀧とて傘

り子うらまきももをぬぬ

目ら赤冠もは乃とる次

出より願ゆる今ハあつて

此鬼酒を力と共かハ佛力

とらひ神力をてつとらとるも

あまふとるつとる

五十三合

凡至又深ね那と息あらりし勝

左右こ字

筋浦乃破軍をくわ花の軍志水

凡玉あけきりし深舟泥んて枯

ひ徐火珠とらてんこり筋浦

は比角小星ひり筋きやんこ

半合乃くりやう左切ある屋

花と女椎花の陣をいす

とこや

五十四合

引色も日比の煤乃時鶴色

五字

相暹羅乃勢を越や花曇り習奥

ひし七巻を新の夜乃月

月色とかまら松詞正廣り

日頃の神よとらひひり引合とて

向上のしとるゝ雞入曉か唱ふ

歌声明王の眸を驚馬より

あらしおお暹羅乃花軍一

一も千を千合とらは心も

らもろる

五十五合

雞頭乃追手の梁の紅糸の分

也

土餅より豆腐よりしる君よ歌鳥

二對乃各目立あうらねあて

はあちつらぬ所あり是か

雞頭や同一さし紅糸負

とあふ其品とこれねあて

紅葉鳥鹿ふらさるるさうら

新糸の因者場を食ひてを

乃うとららるるさうら力業

角力乃外他もはあてを土

餅とりあて 豆腐の初らあて

薄蕪の白きもあて

五十六合

時下に後悔もあり蹴合時百様

乙字右二字

堀也乃眼を孺の鉄輪お

あうらあて標の赤にのなり

て睡さるる物目をさあて

了度と也し、食つきて

時下りしるるをなあて

空の傍負後梅すなり
三足のわらわ輪を世の中のみり
木のこゝろをたむをまや
力をこゝろの中古野出のま三帝
とまの片腕を切らま骨
皮引かるとまをり
鋸を肌を引切て捨
こゝろ素のまを片枝とま
此意地やか
五十七合

欠の亦乃根撰や若手合其角

砂水去る息を古湘江

捕距武

是の木の根ありと撰方のいし
了け負後たてしも道理古湘江
昔は正の唐織をりつ
邪慢を懐く手つし三番打
難や

五十八合

雌の毛虫と捌く羽癖は素

飄鷺くくく風情

苦く——

六十日

獨突乃時をも同をんをく獨樂

戴冠文と次右五字トス

ちわち王く小結く進くもく鬢く白く梅

章敵天く名くあくしくと

引廻くこもとの下界くつく授く子

ちくはくあく胸くをく突くてく絶

入くるく渦くまくひく廻くるく大く独く衆く乃く

うくしくしく乃く泡くとくまくえくしくとくとく

花の惣一

ちくいくりくものく辨く難く合くまくうくぬ

てく去くらくてく肝くをくとくやくしくうくらくらく

六十一台

鬢くのく厩くからく出くてく鳥くいくちく——

五字

噫くにもく知くるくよりくあくらく鳥く伯く樂く毎く雨く

七乃く命く道くはくしくをくりくあくまくらくく

真く里くつくをく毛く臍く関く内くをく乃く

佛く意くをく知くれくあくらく作くしく色く

くくしくかくけく乃くもくまくあくらく口く世く界く

国士や一才の多し
欠伸噓噓心をつめて行相
をたつて又伯樂乃煉磨也
さゆし乃手入今日のつてを襟
裾をかきり立てる不當坐は夫
夫あまもも廿化あらとれと
鷗乃餅し
六十二句

投打乃尻を相手やせつハ庶

しおとに

今日の関籠を狂いあかハ崎花月

五字とに

伊勢町小田原甲雞火とも乃
中河川木戸を限つて取合ふ
童僕の内も亦去かりさぬ
獨遊ひをすは惣くあふ
了者とも羊虫日頃乃意趣を
合て呉越乃名主を頼らば
欠り是くは糸花長安乃
江戸気きて飽迄くらり肥さ
ゆる也
或人乃いつる信濃の弓大昔也
可即も九年母不とあつといふ
ては越後乃園苜を前ひあて

ついで八声の觸頭なるなり右に
孟嘗君の千の鳥のしるしを
一に其千の鳥のしるしを
千をつらうる雞術 三千の
容を越えうるしるしを 戲院
人形の名を以て飛彈の
掾と受領を流すなり
昔のそつうを聲を以て今乃
くつみハ形を工にせり 秘儀
なる過例を以てしるしるの
史記のものとぬるなり
鶴のしるしハ鶏印の也

羽多は羽形なるなり

難波は名二羽とも番ハ

六十五合

尾狂平お強とありし 逆毛の

左右の字

廻廻 浅黄のあつて 月士軍 雪花

尾狂のしるし

雞乃獅子のしるし 逆毛の

此句とありのしるし 未練
も中とせ尾狂のしるし
ありしるし

〜〜首尾十分なるを
も十五年以前乃若氣りて
し〜〜取か〜〜
丁〜〜あ〜〜あ〜〜
口〜〜も牛後と〜〜
あ〜〜詞〜〜
鳥主も亦損淺中のみ廻
表裏あ〜仕立榮〜心の
濃〜は〜
六十六合

撮距小荷歌奉行小隠まにま習奥
し字〜

〜〜を〜〜に〜

軍旗乃り用〜
書片〜中〜小荷 駄
から〜候乃もの此陣まで
つ〜〜
矮歌

〜〜落を乃〜
坂落千馬曹司乃ハ主
得〜〜換〜
か〜〜
経〜〜

三千騎をかつと志先かけて落櫻
拂をさるる五落をれしるも理りこ
夜軍一はかたをて是を方目
の同平しとあてし

秘傳なりあつとる

六十七合

力尾の旗をひらうらうらと總々百之

二字

おぼろの番てをさうく御後

緒開引音を合を味方乃糸冠
まをさしてまをさうけうけうけ

辰の舞羽をひらふてを起る
おとけ濁をれをちのて
力尾の白旗をひらけ
おとけらしてとく歌はら
閑乃ゆ神一乃郷前
謹上再拜一奉ま
六十八合

陸奥殿乃鎧をさるるてしと合

五字

おとけの旗一や叔土儀花月

二字

白足乃先陣後陣

乃の身しむる焼焚の難事
 おもひをくはわつて嘆
 て寒食乃家を氣つくり
 身乃上いふとさきをれり
 異国より火のすむるも何
 今此生鳥ともいふ屍を山吹
 とらへ根を根肉を大根
 一と銀杏の刻おきて
 前世乃其業因こそつ
 人乃その道をせめて涙の
 ちをうへてあひのちも
 去るはるる

七十合

一番乃勝を佐久間吹流 其角

五字

也 貝のかく次雑乃十二揃

諫鼓苔深く治雞坊
 塵靜也とりあつて氏
 馬神の力あはれは一番
 乃奈をつとる事なる是
 例年乃らるるあつて萬
 戸関をさるる
 也 貝十二隠 貝十二

務員を決す受十文あり
勢あり此受委細り
然の夜乃千直をて
ともと染あつて
わんとい司を貝或桶
ゆえ光劔箱弓袋水
引をとりて鳥の跡を寶
と正木ののかり
とらるるまの冠
鼓をうらおを光奉る

鳥沙汰曰

羨母三年五月二日東山乃
仙園をて雜台乃戸あり
公卿待從僧徒亦乃北面の輩
常々祇候乃老も左右を
つたれ銀此賢亦なうて
るあ枝中 用ひ尺乃銀基
を居る勝乃花を結ひけ
る橋樹薔薇牡丹山吹乃
作る花をあつて伶人
叅集 春閑なる御堂
の山乃青山乃とて

草簾を吹和琴を去るる
嗟歎乃舞樂を好む
西の方乃雞をいふなり

一番

左 右衛門督乃鳥字無名氏

右 五條大納言の鳥字千代丸

以上十二番 左傍 卯番 右勝 六番
と記す哥々舞妓與遊下
絶す此の孟を勤む礼を
放宴とらとりつとも方代乃

養談平 傳小 黄昏了
あつてかろく 是を此事
中郷門乃左大臣殿乃傳
朝臣書 奉つる也 其作
乃記可るし合を傳るわ
何れ 是を有也
ちのちのちのちのち

花名乃の後伝

唐子 八合する也

左右總計

屯	雁形乙	二字	三字	五字	麗人
			散		

十六	廿二羽	卅六句	十八句	十叩句	二句
距					

寶晉齋真簡

